



広島国際学院
創立79年



勝利を目指して（中国大会決勝リーグのひとこま）

短大が第三者評価を受審

特集 みんなで考える環境問題！	2-3
金属・鉄鋼関係の研究者が集合	工学部 4
広島オーストリアウィークを共催	情報学部 5
カーブ振興への研究ひろがる	現代社会学部 6
第三者評価を終えて	短期大学部 7
高校から発信	8-9
第39回高城祭	10
バスケットボール部中国初制覇・全国へ	10
私の大学生活	11
学生時代の思い出と社会人になって思うこと	11
クリスマスフェア	12
「ツール・ド・北海道」悲願の総合優勝	12
今後の主な行事予定	12

広報

第68号

平成19年1月1日発行

URL <http://www.hkg.ac.jp/>

特集

みんなで考える環境問題!

たてまち公開セミナー



スターリングエンジンの実験(第3回)

「環境世紀」である21世紀において、私たちは目先の利益を追うだけでなく、将来の地球のために何をなすべきか一刻も早く考えていかなければなりません。恒例の「たてまち公開セミナー」、今年度は「水」、「音」、「空気」に着目した環境問題を取り上げて、9月から11月にかけて3回シリーズで行われました。毎回、地域の産業や学術、行政、市民など各分野の取り組みについて、興味深い事例が紹介されました。テーマによっては、聴衆が100名を超え、講演後の質疑応答も大幅に時間オーバーするなど、地域貢献を目指す本学として有効な情報発信ができたものと思います。

第1回 — 水 — 「よみがえれ広島の水環境！」

9月16日(土)

1. 「広島湾の生き物と自然環境」

宮島水族館専門員 よぶさか たつお 呼坂 達夫氏

宮島水族館勤務の傍ら長年、宮島周辺の水環境、特に包が浦周辺の水生生物を調査するとともに、地元の小中学校の児童、生徒にも調査に参加してもらい、環境教育も進めてきました。これらの成果を紹介しながら、宮島、広島湾の環境評価を行いました。この10年～20年で、宮島周辺の水環境はかなり悪化しており、対岸の廿日市、大野の団地開発や、カキいかだの増設などが主な要因と思われます。環境問題に高い関心を持ち、積極的に調査に参加してくる生徒もたくさんいます。



2. 「よみがえれ水環境、芦田川」

盈進中学高等学校教諭 おおきた ゆうじ 大北 祐治氏



長年、生物クラブの生徒とともに、広島県の東部を流れる一級河川、芦田川の環境調査を行い、多くのデータを集め、研究会などで発表しています。芦田川は中国地方でも最も汚れた一級河川といわれていますが、この環境調査の業績が評価され、生徒とともに環境省より環境保全功労者表彰も受けています。特に、希少種のスイゲンゼニタナゴという魚が、今なお芦田川に生息していることを確認し、これらの希少種保護のためにも、また環境を守るためにも何をすべきか生徒と一緒に取り組んでいます。

3. 「誰も知らない広島の名水と悠々人生」

本学工学部バイオ・リサイクル学科教授 ささき けん 佐々木 健

広島はかつては名水に恵まれた町でしたが、周辺の宅地開発や森林の喪失により急速に名水が少なくなっていることを、過去30年に及ぶ名水調査の結果にもとづき紹介しました。広島の名水は軟水で、とてもきれいなことが特徴ですが、ラドンを含む健康名水も今なお分布しており、おいしくて健康にもよい、大変珍しい名水の出る地域です。この名水が、広島酒、上田宗箇流の茶道、もみじ饅頭、お好み焼きなど食文化に影響を与えていることも紹介しました。



第2回 — 音 — 「私たちの生活の中の騒音問題」

10月21日(土)

1. 「道路交通騒音の実際と遮音対策の取り組みから—木製塀による防音対策とその評価—」

鳥取県産業技術センター機械素材研究所生産システム科長 こだに しょうじ 小谷 章二氏

自動車交通網の発達で暮らしが便利になる反面、それに伴う騒音被害も深刻になってきています。ここでは道路交通



騒音の実際と遮音対策に関する最新の研究事例を紹介しました。特に、環境に優しい間伐材を利用することの有効性について、動画と収録音を交えながら具体的に示しました。使用材について質問が出されるなど、参加者との間で熱心な討論を行いました。

2. 「騒音規制の概要」

広島県環境部環境対策室主任主査 なかがわ やすお
中川 保夫氏

「物売り」や「コンプレッサー」といった近隣騒音については、大学にも相談がいくつか寄せられ、これらの問題を考える場がほしいとの要望もあってこの講演が実現しました。道路や工場騒音などについての法規制と、行政が関わって解決した騒音問題の事例をいくつか説明しました。参加者からは、近隣騒音に関する行政の対応について熱心な質問が出され、この問題に対する関心の高さが伺えました。



3. 「音の不思議とそのしくみーサウンド入門ー」

本学情報学部情報デザイン学科教授 たかぎ なおみつ たかくわ よしあき
高木 尚光・高桑 誠明

昨年来、岩国基地への艦載機の移転計画にともなう騒音問題が発生し、住民の不安が高まっています。このような状況を受け、騒音問題に取り組む本学初の試みとして、厚木基地の航空機騒音事例も急遽交えて講演しました。聴講された皆様には100dB程度の航空機騒音を体験していただき、またサロンでは、小川精機(株)と(株)リオンのご協力により、希望者に騒音計測も体験してもらいました。

第3回 — 空気 — 「新エンジンの開発と環境問題」 11月18日(土)

1. 「地球にやさしいスターリングエンジンって?」

本学工学部機械工学科教授 こう じゅい
黄 樹偉



石油の大量消費により、地球の化石燃料資源は日増しに少なくなってきました。また、化石燃料の燃焼から発生した大量のCO₂により、地球温暖化が加速的に進行しています。その様な中で、化石燃料を使わずに、太陽熱、海洋熱、ゴミ焼却熱、バイオマスを使っても動力を取り出せるスターリングエンジンは地球にやさしいエンジンと言われております。このエンジンの原理、構造、および実物を紹介しました。

2. 「水素ロータリーエンジンの開発状況」

マツダ株式会社技術研究所主幹研究員 みすみ まさのり
三角 正法氏

マツダ株式会社では、デュアルフューエルシステムを持つ水素ロータリーエンジン車を開発しました。燃料電池車と同様にクリーンな車ですが、原理は異なり、水素をエンジンで直接燃焼させて出力を得ます。通常のロータリーエンジンに改良を加えることで水素でもガソリンでも走行可能としているため、水素インフラ普及の過渡期でも高い利便性を発揮できる技術です。2006年3月から地方自治体やエネルギー関連企業などにリース販売を開始しています。



3. 「バイオエタノールで走るバイクの展示」

本学工学部機械工学科助教授 うつみ のあ
内海 能亜



市販のバイクを改造した、お酒(スピリタス：アルコール96%のウォッカ)で走るバイクを展示しました。バイオエタノールは再生可能な燃料であり、地球温暖化の抑制に大きく貢献します。わが国でも、3%のアルコール燃料をガソリンに混ぜて走ることが出来るようになりました。会場では、実際にエンジンをかけ、お酒の香りがする排気ガスを出しながら走行させてみました。

本学10号館で開催

金属・鉄鋼関係の研究者が集合

工学部

機械工学科教授

李木 経孝



8月8日～9日、本学中野キャンパス10号館で日本金属学会第46回・日本鉄鋼協会第49回の中国四国支部合同講演大会が開催され、中国四国の大学、企業から135名の研究者、技術者が集いました。初日は金属学会中国四国支部長の柳澤平氏(広島大学教授)の開会挨拶の後、68件の学術講演があり、本学の発表4件では大学院生も活躍しました。夕刻から学生会館において、鉄鋼協会中国四国支部長の平松博之氏(新日鐵住金ステンレス(株)執行役員・研究センター長)の挨拶を皮切りに懇親会が行われ、昼間の厳しい質疑応答とはがらりと変わった雰囲気での情報交換が行われました。二日目は吉田昌之氏(日本パーカライジング(株))による本多記念講演「最近の環境対応型表面処理について」、山縣裕氏(ヤマハ発動機(株))による湯川記念講演「先進材料技術による自動車車体およびエンジンの変革」が行われ、午後からは三菱重工業(株)広島製作所および広島研究所に出向き、製鉄機械や燃料電池の開発を見学しました。



アスベストも溶かしてガラスに再生

産学官連携事業—グルノーブル大学EPM(フランス)訪問—

バイオ・リサイクル学科教授 遠藤 敏郎



EPMスタッフ

広島県と企業、そして大学の産学官連携事業として、高周波誘導加熱による溶融炉を広島のある大手リサイクル企業が導入することになりました。通常よりはるかに高い周波数を用いるコールドクルーシブルとなっています。「コールドクルーシブル」はコイルを通して発生する高周波磁場中の導電性物体に誘起する電流によって物体自体を発熱・溶融させる他、磁気的な反発により溶融物が炉壁に接触しないというのが基本原理ですが、今回の溶融炉にはアスベスト、ガラス溶融も可能とする幾つの特徴があります。このプロジェクトの理論面担当を引き受けている関係で、打合せのため9月23日から5日間、フランスのグルノーブル大学EPMを訪問しました。

現地では、EPMスタッフがコールドクルーシブルの小型システムを用いながら説明。金属溶融以外に、アスベストの溶融ガラス化、リチウム回収等における興味ある現象を紹介してくれました。筆者としては、今回導入を予定している溶融炉を用いて、レアメタル等の有用金属の分離・回収等に期待を寄せています。

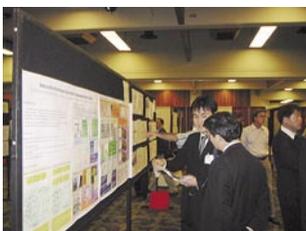
この数年スイス、フランス、イタリア等の産学官連携の実態を視察してきていますが、EPMをはじめとする欧州の共同研究体の規模とその構想力には感心しています。日本で言えば産業クラスター構想に対応しているのですが、地域にあった産業創生、或いは地方大学のあり方を探る上で非常に参考になったと考えています。



バ스티ーユ城

真剣なディスカッション

—国際会議“ASPE21st”に参加—



国際会議

工学研究科 博士課程 材料工学専攻3年

吉田 昌史

工学研究科 修士課程 機械工学専攻2年

栗原 亮

10月16日～19日、米国カリフォルニア州モンレー市内で開催された米国精密工学会第21回年次総会(ASPE21st)に参加しました。アメリカ、ヨーロッパ諸国、日本、韓国、中国など13カ国から491名の研究者が参加。157件の論文発表に加え、先端技術の展示も35件ありました。我々は「超高純度アルミニウムのナノインデンテーション」と「ニオブ酸リチウムの超精密加工」に関する研究2件を発表するとともに、連日、最先端の研究発表を聴講したり、各国の研究者と情報交換をしたりしました。先端技術の展示では、特に医療分野を目的とした

数ナノホールの加工技術、表面粗さ2nm(ナノメートル)以下の表面加工処理技術、精密加工のFEM解析について、各国の技術者から数多くの情報を得ることができました。2時間以上にわたりディスカッションしたノースカロライナ大学の研究者からは、帰国後、共同研究を提案するメールがあり、現在交渉中です。このような国際会議への参加を通して国際性を養うことができたことは、我々の今後にとっても大きな成果であると確信します。

《工学部より》 次年度、電気電子工学科とバイオ・リサイクル学科から初の卒業生が誕生します。

情報学部

広島オーストリアウィークを共催

ノーベル平和賞作家を記念

情報デザイン学科

駐日オーストリア大使館、広島オーストリア協会、及び本学の共催により「広島オーストリアウィーク」が開かれました。これはオーストリアの作家ベルタ・フォン・ズットナー女史のノーベル平和賞受賞100周年を記念する展示会に加えて、広島市民とオーストリアとの交流を深める催しで、11月9日～14日までの6日間、本学立町キャンパスにて実施されました。

9日夜のオープニングセレモニーにはモザー駐日オーストリア大使のほか、サンフレッチェ広島のペトロヴィッチ監督らも列席。本学の今村学長、鶴理事長とともに開会を祝いました。また、今年はモーツァルト生誕250周年にあたることから、リサ・中道さんによるピアノ演奏も披露されました。10日以降はズットナー研究者による講演、ウィーン在住ガイドによるオーストリア紹介、シネマエッセイの鈴木由貴子さんによるオーストリア映画紹介、アンサンブルコンサートなど、楽しく多彩な行事が催され、大勢の市民が参加しました。



開会式であいさつする今村学長



学生デザインによるワインラベルの展示

ウィーク開催にあたっては広島オーストリア協会と本学立町キャンパス、及び情報学部・情報デザイン学科が準備を担当することになり、4月6日の三者打ち合わせから実質の準備がスタートしました。本学科は平和への想いを大切に「“ちいさな平和”コンテスト」を2年間にわたって主催していることと、オーストリア・リンツで毎年開かれる芸術・先端技術・文化の国際的祭典「アルス・エレクトロニカ」に教員、学生が参加するなど、オーストリアとの関わりがあることから、企画、チラシ作成等で協力させていただくことになりました。特に、①学生作品「平和のイメージ～ワインボトルのラベルデザイン～」の展示(協力：(株)広島三次ワイナリー)、②学生、教員による公開講座「メディアアートとデザインの潮流」、③メディア・アーティスト山田亘さんによる公開講座「過程の形状—プロセスの持つ意味の姿」と作品展示、④メディア・アーティスト渡邊英徳さんによる公開講座「物理空間とWeb空間を重ね合わせる」と作品展示の4テーマを主催する形でのお手伝いもさせていただき、参加学生、市民と共にウィークを盛り上げることが出来ました。なお、学生がデザインしたワインラベルは三次ワイナリーの冬のイベントでも展示されます。

ウィーク開催にあたっては広島オーストリア協会と本学立町キャンパス、及び情報学部・情報デザイン学科が準備を担当することになり、4月6日の三者打ち合わせから実質の準備がスタートしました。本学科は平和への想いを大切に「“ちいさな平和”コンテスト」を2年間にわたって主催していることと、オーストリア・リンツで毎年開かれる芸術・先端技術・文化の国際的祭典「アルス・エレクトロニカ」に教員、学生が参加するなど、オーストリアとの関わりがあることから、企画、チラシ作成等で協力させていただくことになりました。特に、①学生作品「平和のイメージ～ワインボトルのラベルデザイン～」の展示(協力：(株)広島三次ワイナリー)、②学生、教員による公開講座「メディアアートとデザインの潮流」、③メディア・アーティスト山田亘さんによる公開講座「過程の形状—プロセスの持つ意味の姿」と作品展示、④メディア・アーティスト渡邊英徳さんによる公開講座「物理空間とWeb空間を重ね合わせる」と作品展示の4テーマを主催する形でのお手伝いもさせていただき、参加学生、市民と共にウィークを盛り上げることが出来ました。なお、学生がデザインしたワインラベルは三次ワイナリーの冬のイベントでも展示されます。

ロボット、ゲーム…催し多彩

情報工学フェア

情報工学科

本学科の教育内容や研究内容の一端を市民に公開するイベント「情報工学フェア」を、立町キャンパスにて9月17日(日)に開催しました。

ロビーでは小型ロボットのデモンストレーションが行われました。巧みに障害物を避けて走ったり、かわいらしく踊ったりするロボットに子供たちも興味津々といった様子でした。LEGO Mindstormによるロボット組み立て教室もあり、子供が保護者や学生に教わりながら、小さな手で一生懸命ロボットをこしらえていました。また、ホールでは花粉吸着シミュレーション、音声認識ロボット、ネットワークゲーム体験など、盛りだくさんの展示で大人も子供も楽しんでいました。



昨年に続き2回目となる当日は折悪しく台風が接近。スクリーンに映し出されるネットニュースの台風情報にも注目が集まりました。天候が心配される中、教員とともに説明員を務めた学生たちは、明るく元気よく来場者に対応していました。なお、9月18日付の中国新聞朝刊22面に「ロボットの技術を紹介 中区で情報工学フェア」というタイトルで掲載されました。

《情報学部より》 次年度、情報工学科と情報デザイン学科から初の卒業生が誕生します。

カーブ振興への研究ひろがる

—四大学合同ゼミを開催—

現代
社会学部



真剣に聞き入る迫ゼミ生

現代社会学部の迫ゼミ(社会学演習Ⅰ、Ⅱ)では、市内の各大学で行われているカーブに関する研究・調査・活動などを互いに報告しあい、その成果、プロセス、情報などを共有化するため、四大学による合同ゼミの開催を呼びかけました。

四大学とは、広島市立大学、比治山大学、広島経済大学、そして本学。この呼びかけに各大学が賛同し、10月14日(土)に、四大学の学生36名、教師6名が立町キャンパスでの合同ゼミに参加しました。また昨年引き続き、広島東洋カーブの松田オーナーをゲストとしてお招きしました。

前半の報告会。市立大からは、球場の案内を多言語にするなどのアイデアが提案され、比治山大からは、球場へ足を運ぶ観客の動向調査などが報告されました。また、経済大からは、大学公認プロジェクト「Fun Loving People HIROSHIMA」の

概要が紹介され、本学からも、主力選手の特徴を生かしたキャッチフレーズの開発などを提案しました。

本学の発表を担当した林山雄太君(3年生)は、「カーブ選手一人ひとりに愛称があると盛り上がる。これからも球場に足を運んで自分たちの考えた愛称をアピールしていきたい」と語りました。

松田オーナーより、今回の合同ゼミについて「思いがけない提案もあり、新しいアイデアを生み出すきっかけになる」と高い評価を受けました。また合同ゼミの様子は、中国新聞および広島テレビのニュース番組「テレビ宣言」でも紹介されました。



松田オーナー(中央)と記念撮影

NPO活動、理解はより深く、参加は気軽に

—学生・生徒向け導入本出版—

現代社会学科 3年 おがわ ひろのり
小川 弘法

この夏、私はNPO法人「ひろしまNPOセンター」のインターンシップ・プログラムに参加しました。実は私は「NPOとはどんなものか分からないまま」参加したのですが。

今日、私たちの身の回りにはさまざまな社会問題が点在しています。しかしながら、企業や行政によるサービスでは限界があり、それらの社会問題が置き去りにされる場合があります。NPOはそれを解決あるいは改善して、私たちが暮らす社会が少しでも良くなっていく様に活動しています。と言われても分かる人は少ないと思い、中・高校生そして大学生にNPO活動を少しでも理解してもらおうとこのプログラムに参加した大学生が自分たちの思いを冊子にして出版する事にしました。完成した冊子『広島版 のぞいてみよう！NPO』は、NPOに気軽に参加してもらうためのきっかけとなる導入本です。私と3年生の増田恵子さん、広島大、県立広島大、広島修道大の学生6人が一緒に話し合いながら、冊子に盛り込む内容を決めていきました。内容は、参加者それぞれが福祉、雇用、環境、中間支援の分野で活躍するNPOに飛び込み、NPOの強さや存在を肌で感じた事を大学生の目線で、自分たちの言葉で書いた体験記が中心です。クイズやNPOについての解説も加えました。



『のぞいてみよう！NPO』出版記念会にて
(後列中央が小川さん)

私は「ちゅうごく環境ネット」で裏紙を使った名刺作りやエコバックを持参しての買い物を体験し、理屈を抜きにした環境への取り組みをしていく事が大切では…とつづりました。この冊子でNPOを知ってもらい、何かしたい人に役立てば良いと思います。NPOはとても暖かくて親しみやすい人ばかりです。そんな事も一緒に伝えられればと思っています。ぜひ、読んで下さいね。

※『広島版 のぞいてみよう！NPO』は特定非営利活動法人ひろしまNPOセンターで販売しています。1冊300円(税込)。

お問い合わせは同センター(082-511-3180)まで。



審査風景:理事長挨拶

自動車短期大学部 第三者評価ALO[※] 益永 茂治

本学は先の学校教育法の改正により、平成17年度から義務付けられた認証評価機構による「第三者評価」を当初の計画を1年前倒して18年度に受けることとし、昨年9月末に実施された訪問調査をもって全ての審査を終えた。審査結果の内示は本年1月中旬に示されるので、ここではこれまでの経緯について紹介する。

平成16年春、従来のPDCA方式の自己点検評価報告書第3巻(平成14・15年度版)の作成に取り掛かろうとしていた頃、短大基準協会から第三者評価報告書の作成マニュアル(案)が公表された。そこで、予行演習も兼ねてこのマニュアルに準拠して試行してみようということになり、17年2月に第4巻(平成14・15・16年度版(認証用))を作成した。この経験と改善への取組みを早めたいとの思いが重なって急遽18年1

月、短大自己点検評価委員会の下に本学教職員と法人各部を加えた原稿作成チームを組織してキックオフ、全員参加で原稿作成を開始した。これまでの活動実績から記述したいことも多く、手分けして作成した1次原稿は140ページを超える内容となった。基準協会からは合計100ページに収めることが求められているため、第2段階で全体の筋通しと項目ごとの重点化により大幅に削減すると共に、指定された添付資料、参考資料とそれら全ての根拠資料の準備を全員が協力して行い、6月27日に短大基準協会に提出を完了した。この間、6月初めに本学担当評価チームが結成されたので、チーム責任者と連絡・調整の結果、9月25日から3日間の訪問調査(面接調査)が合意された。これに向けて全員研修会を行い、評価報告書の共通認識をより強固にすると共に、領域ごとの想定問答を作成して万全を期した。訪問調査に先立ち自己点検評価報告書を熟読されて来学された評価員諸先生方には、学内視察と評価領域ごとの質疑応答により、本学の現状及び将来展望について十分にご理解頂けたようで、特段大きな問題も指摘されず無事終了した。

今後、年度末の正式評価を待って今回の自己点検評価報告書を第5巻として公表する予定である。足掛け3年に渡る活動成果は、理事長、学長、法人各部の絶大なご支援とご協力ならびに本学教職員の一致団結の賜物と深く感謝している。

※ALO(Accreditation Liaison Officer)：第三者評価連絡調整責任者

ゼロハンカーと自動車実習紹介

NHK大学紹介で放映

NHK広島放送局のニュース番組「お好みワイドひろしま」では、広島大学・短大を紹介するコーナーを設けている。10月26日には本学部が取り上げられ、楽しくもまた充実した学生生活が放映された。



自動車実習の様様

これに先立つ10月2日、取材クルーが本学を訪れ撮影が行われた。2年生の村田明日香さんがナビゲータを務め、キャンパスを案内して回った。毎年全国大会で上位に入賞しているゼロハンカーの製作初期段階のボデーフレームの製作風景や、グラウンドで砂煙を上げて疾走するゼロハンカーが撮影された。また中国地方で唯一の自動車短大として、自動車実習の様相がいろいろな角度から撮影された。

最後に、前年度の卒業生が達成した「2級整備士試験全員合格」の横断幕に向かい、2年生が「今年も全員合格を目指して頑張るぞー」と氣勢を挙げて締めくくった。



ゼロハンカー製作風景

後期より気持ちも新たに 一学舎全館お色直し

短期大学部の建物外壁のリニューアル塗装工事が、7月15日から2ヶ月間で実施された。授業に支障をきたさないようにと、夏休み期間中を利用しての実施である。建築時に塗装されたまま約18年を経過し建物の傷みも進んでいたが、見違えるように化粧しなおされた。ここで学ぶ学生ともども教職員の気分も一新され、お客さまも胸を張ってお迎えできるようにリフレッシュされた。9月16日より、今までにない新鮮な気持ちで後期授業を開始した。



美しく塗りかえられた短大部学舎



8月に行われた広島県吹奏楽コンクールで金賞を受賞し、全日本吹奏楽コンクール中国大会への切符を手にした。4年連続受賞とあって部員たちも身を引き締め、中国大会へ向けて練習した。8月の練習は特に過酷で、毎日が移動の連続だった。色々なホールで練習できるのはありがたいが、その分楽器運搬とセッティングに時間と体力を要するのである。

今年の課題曲は「パルセーション」。精密な機械のような作りの中からにじみ出る情感を表現しなくてはならない難曲である。正確な技術と表現力が両方求められる。自由曲はO.レスピー作曲「ローマの噴水」。遺跡の噴

水をさらびやかに表した曲で、これも非常に難しいがその分演奏効果も高かった。

満員の広島厚生年金会館、エントリーは21番と高校の部最後の演奏だった。大きなプレッシャーの中、今までで最高に集中できた良い演奏だったと思う。結果は4年連続で金賞を受賞したものの、全国大会出場にはあと一歩及ばなかった。しかしこの経験は部員たちの大きな宝物になったことだろう。応援してくださった皆様に心より感謝する。

一六〇〇人集う

オープンスクール開催



九州地方を襲った台風13号の余波もすっかり消え、秋晴れの好天が続き始めた9月24日(日)、抜けるような青空のもと高等学校のオープンスクールは挙行された。大勢のお客様を迎える準備は早朝から着々と進められ、7時30分過ぎに一人目の中学生を迎えた。その後続々と県内各中学校からの生徒、保護者が来校した。本年度の参加者数は過去最多であった昨年をわずかに上回り1,600人(そのうち保護者180名)に及び、9時から13時ごろまで、校内はごった返した。来校者を800人ずつ二組に分け、教職員、応援生徒240人で懸命に接待したが、行き届かない点もあったのではと反省している。体育館では在校生や卒業生代表のスピーチなどを催し、その後は公開講座と実習を見学。本校自慢の学食も全員に体験していただいた。

オープンスクールは来年度入試を占う重要な行事と各学校とも認識している。本校でも、過去のデータから参加者数と受験者数の相関関係は高い。本校の受験者数は広島県内の高校ではここ10年常にトップクラスである。今後も生徒・保護者の信頼を維持していくため、さらに優れた教育内容を作り上げていかなければならない。

オープンスクールに参加して

府中緑ヶ丘中学校3年 野坂 奈央さん

私はオープンスクールに参加して、国際学院の良さを知ることができました。グラウンドや校舎などにかくすべてが大きく、圧倒されました。班単位で在校生に一人ずつついでいただき、英会話や家庭実習、そして珍しい陶芸やロボットアームなど見学しました。どの人も皆、とても生き生きしていて感心しました。中でも興味を持ったのが「ハンゲル」講座です。これはここだけのオリジナルだと思います。色鮮やかなチマチョゴリを着た生徒は明るく、先生もユニークな人で、これなら朝鮮半島のことも楽しく勉強できると思いました。他の高校にはない素晴らしい特色を持ち、先生方も生徒も活発で、自分の力を伸ばしていける学校だと感じました。

友好温まる小春日和 —広島朝鮮学園訪問—

ハンゲル講座講師 リョム ファソン



11月17日(金)、ハンゲル講座受講生(普通科2学年・32人)が朝鮮学園を訪問し、「体験学習」に臨んだ。朝鮮学園の先生や生徒たちとまず交わす「アンニョンハセヨ」の元気な挨拶にも、日頃の学習の成果が発揮された。続いて発音練習や朝鮮学園の生徒との意見交換なども行われた。

授業の後には交歓会が催された。ユッケジャン(肉汁)やキムチ、ナムルなどの昼食をいただき、「辛い、おいしい」と会話もいっそう弾んだ。有意義で楽しい時間はあっという間に過ぎ、両校生徒は「タシマンナジャ、また会いましょう」と別れを惜しんだ。民族、学校は異なっても平和都市・広島でともに学び育つ高校生、未来のアジアを担う世代として友好を確かめ、深めた一日だった。

日朝の生徒が互いに交流するハンゲル学習は、全国でもきわめて珍しい取り組みである。各地のハンゲル教員27人がこの日を選んで研修に訪れ、授業の様子を見守った。

広大な大自然に触れる 北海道
引率教師 金田 浩司



楽しいラフティング

生徒199名、教員9名の北海道修学旅行団は、函館山から見る絶景、函館市場の活気と新鮮な海鮮料理、トレッキングやラフティングなど広大な自然に触れる体験学習、どこまでも続く自然に囲まれた一本道、おまけに日本ハムファイターズのタイミング良いリーグ優勝と札幌での優勝セールなど、毎日過ごしている広島では体験できない貴重な5日間を北海道で過ごすことができました。

日頃の行いが良いため(?)、滞在した函館、ルスツ、札幌、小樽など全ての地において天候に恵まれ、全員大過なく広島空港に無事帰還。広島空港での万歳三唱でフィナーレを迎えました。

集団行動やマナーの大切さを学び、大自然に触れて豊かな人間性を育むことができました。そして、学校以外の場所で友人と共に行動し、友情を深めることのできた有意義な「修学」旅行でした。

韓国修学旅行を終えて
普通科2年2組 向 絵理奈



旅行中の乙女たち

初めての飛行機、初めての海外旅行で、ドキドキワクワクでした。広島を飛び立ち、韓国へ。緊張しながら入国審査を受けました。仁川空港の大きさにはビックリ。

初日は漢江ディナークルーズと63タワーで見た夜景の美しさが印象的でした。高速道路をいっぱい埋めて走るヘッドライトとテールランプが二色の河のようでした。二日目は、まず38度線を望む統一展望台へ。天候もよく、北朝鮮の様子が望遠鏡でよく見えましたが、国境線を通る臨津江は灰色に濁っていて不気味な雰囲気を漂わせていました。その後慶州へ。移動が長くちょっと疲れましたが、晩飯のプルコギがすべてを吹き飛ばしてくれました。広島にも韓国風のプルコギの店があると聞いたので、是非行ってみたいですね。三日目は慶州市内を観光したあと、再びソウルへ。四日目は待ちに待ったソウル市内自由行動とロッテワールド。韓国の大学生のガイドさんはとても日本語が上手で、私たちの「わがまま」に付き合ってくれて、いろんなところに連れて行ってくれました。最終日は出発が早いので朝5時起き。キムチの専門店でお土産を買いました。味見もできたので、一番おいしいものを選びました。

海外に旅行に行くということは、異文化を経験し、自分の視野を広げることだとつくづく感じました。言葉が通じなくて困ったこともありましたが、思い出に残る修学旅行でした。

常夏の島 異文化体験 ハワイ
引率教師 望月 恵司



ハワイの町中を闊歩

生徒・教員合わせて54名で常夏の島ハワイへ行ってきました。ほとんどの生徒が海外旅行初心者で、出入国時の厳しいチェックや手続きに多少戸惑っていました。現地に着くと、日本との時差

は19時間、通貨はドル、TVをつければ英語という、非日常の環境が待っていました。しかし、生徒達はすぐに順応し、それぞれのハワイを満喫していたようです。主な学習内容は、様々な異文化体験、えひめ丸慰霊塔参拝の平和学習、自主研修などでした。特に、えひめ丸慰霊塔では、日本から準備してきた千羽鶴を捧げ参拝したことで、国際社会における、文化の違いへの相互理解と話し合いの大切さを学ぶことができましたと感じています。透き通った青い海と壮大な景色の中で、異文化に触れ、いろいろな経験をしたことは、生徒達にとって貴重な体験となりました。旅行中、規律を守り、節度ある行動をとれた生徒達に感心すると共に、短期間で成長した生徒達をあらためて頼もしく思いました。

ハシャギっぱなしの沖縄
普通科2年7組 玉江 傑



「海の底は快適デス」

沖縄に行ったら心は癒されました。ずっと騒ぎ続けていたので、4泊5日もあつという間に過ぎてしまいました。

楽しい思い出ばかりではなく、日本で唯一行われた地上戦のことで平和への意識をしっかりと高めることが出来ました。特攻で行く前に書かれた親への思いを込めた手紙を読んだ時、自分と同じ歳なのに、なんてしっかりしているのかと驚き、尊敬の念とともに悲しさがこみ上げてきました。

人生初のダイビングにも挑戦しました。慣れるまではさすがに少し恐怖がありました。水の中に潜り続けるのは少し不思議な気持ちで、貴重な体験が出来ました。いろんな所を見て思ったのは、やはり沖縄の海は美しいということです。あの海を見るだけで私は気持ちが安らぎ、ずっとこの場所に居られたらいいなと思いました。

旅行の間、普段関わりを持たない人と関わりが持て、友達が増えてとても嬉しかったです。沖縄がよりよくなったのも一緒に旅行を楽しめる友人が増えたからだと思います。

自分にとって沖縄は、第二の故郷のように感じました。いろんなことをしたり感じたりして、自分が成長したように思えたからです。自分が成長するのはやはり嬉しいことだと改めて思いました。いろんなことに感動しましたが、自分の気持ちをそのまま言葉に表現出来るようにして、沖縄の良さを伝えていきたいです。

本当に、沖縄は最高でした。

オーストラリア姉妹校3度目の来校
国際交流室



遷保姫神社で異文化体験

12月12日から1週間、オーストラリアにある姉妹校(Grovedale College)から生徒9名と先生2名が来校しました。ホームステイをしながら本校の生徒とも交流を深めました。1学年全体で歓迎会を開き、温かい歓迎と吹奏楽部の演奏に一同感激していました。

その後の遠足では遷保姫神社と西向寺を訪ね、日本の宗教に触れました。佐々木貞子さんの話を聞き、みんなで折った千羽鶴を携え平和公園を訪ねました。原爆の子の像(折り鶴の碑)の前で追悼セレモニーを行い、折り鶴を手向けました。原爆資料館では貞子さん自ら折った細かい鶴に驚き、悲しい過去の歴史に不戦の誓いを新たにしていました。

7回行われた交流授業では英語を使ったゲームをしたり、日本の伝統的なおもちゃを作ったりしました。また、調理実習を通して新しい友情の輪も広がっていきました。陶芸・書道・美術では個性的な作品ができました。オーストラリアには柔道の授業はあっても剣道はないとのことで、授業の中に剣道も取り入れ、男女ともとても楽しい体験になりました。茶道ではお点前を体験し、奥深い味に舌鼓を打っていました。日本史の授業では沖縄の楽器演奏もあり、とても和やかな雰囲気の中で楽しく学ぶことができました。

広島駅でのホストファミリーとの別れはとても辛い光景でした。温かいもてなしに感謝し、別れをいつまでも惜しんでいました。言葉の壁を越えた確かな友情が築かれました。来年には本校からオーストラリアを訪ねる予定です。さらなる交流を期待します。

法崎佳成子さん(普通科2年) 中国ジュニアゴルフ選手権新人戦で優勝

先人に学び、屈強な精神で 第39回高城祭 —侍—



高城祭実行委員会 広報部長 ^{ひぐま だいすけ} 日隈 大輔

10月28日から29日にかけて、本学中野キャンパスで第39回高城祭(大学祭)が開かれました。今年の高城祭のテーマは「侍」。偉大な先人たちは何事にも折れない屈強な精神を持っていたそうです。私たち高城祭実行委員もこれに見習い、屈強な精神で高城祭を作り上げていこうという一心でこのテーマを採用するに至りました。

会場となるグラウンドに至る坂には、今回も過去の高城祭で用いられた看板や今回のテーマを解説するテーマ解説看板などがずらりと並び、来場者の興味を引いていました。

入口に設置された巨大な入場門をくぐると、各サークルや研究室、そして留学生が営むバザー店が大賑わい。実行委員が協力して作り上げた巨大なステージでも様々なイベントが行われ、連日盛況でした。

当夜祭(28日)では、カラオケ大会や毎年恒例の高城ビンゴ(ピンピンビンゴ)などに「Kギャル」も加わり、楽しい雰囲気さがさらに華やぎました。

昨年すさまじい盛り上がりを見せた終夜祭(29日)のゲストライブ。前年に引き続き「クレインフライ」、そして今回の目玉である「ロードオブメジャー」が登場しました。全国的にも有名なバンドとあって大勢の観客が押し寄せ、会場の熱狂は最高潮に達しました。

ラストを華麗に締めくくったのは毎年恒例の花火。ステージ裏からV字に広がる花火に始まり、校舎屋上から打ち上げられる巨大な花火など、例年にも劣らぬ素晴らしさに仕上がりました。

涙の中国初制覇、全国へ跳ぶ

バスケットボール部 主務 河内 桂子(現代社会学部2年)

今回、私たちバスケットボール部(男子)は秋の中国大会で初めて優勝し、第58回全日本学生バスケットボール選手権大会(インカレ)出場を決めました。

今までは約10年前の4位が最高で、ここ数年は6位止まりでした。また今年のチームは4年生1人、3年生1人、2年生4人、1年生9人と下級生が中心で、他学に比べ経験が浅く、とても優勝できるチームではないと言われていました。しかし、下級生が多いことは決してマイナスではありませんでした。上級生たちは下級生に負けたくない思いでやる気を出し、下級生も上級生の気迫を感じ、互いに意識合い競争心を駆り立て、そのことがチームに良い影響を与えました。通常の練習はもちろんのこと、練習の前後や休みの日でさえ選手の姿が体育館にあり、皆それぞれ自主トレーニングを行ってきました。そんな努力の積み重ねがあって、今度の中国大会は優勝できたのだと思います。

今まで勝てなかったチームに勝ち、インカレ出場権を賭けた最終戦は本当に一生忘れられない試合になりました。選手がお互いを信じ、協力し合い、チーム全員が一丸となって挑んだ試合でした。優勝し、インカレ出場が決まった時のあの気持ちは言葉にどう表せばいいのかわかりませんでした。本当に嬉しかったです。でも一番嬉しかったのは監督の武良先生だと思っています。試合終了後、先生を見ると目から涙がこぼれていました。まさか先生が泣くなんて思っていませんでしたからビックリしましたが、それ程喜んでくださったのだと思います。勝って先生をインカレに連れて行って差し上げることができ、本当に良かったと思いました。

中国大会終了後は、インカレに向けこれまで以上に練習を重ね、良い結果を出せるようみんなできる限りのことをしました。全国のレベルは高く、一回戦敗退という結果に終わりましたが、この経験を生かし、さらに努力を積んでインカレ出場常連校になっていこうと思います。

私たちがインカレに出場できたのは、たくさんの皆様方の応援と協力のお陰です。これからますます頑張っていきますので、何卒、応援よろしくをお願いします。



中国大会優勝、監督を囲んで



全国大会での熱戦

隠善 智也さん(工学部4年) 読売ジャイアンツ育成選手に指名され入団

私の大学生生活

論文が始まり、不思議なつながり



夏、浴衣姿で応援する藤本さん

— カーブ応援サークル結成、1軍帯同取材も —

現代社会学科 4年

ふじもと のりふみ
藤本 倫史

私の大学生生活は本当に色々な「縁」に恵まれたものでした。

こんなことをいうと親父臭いとか古臭いと思われるかもしれませんが、本当に色々な人に出会い、貴重な経験ができた4年間でした。

3年生の春に「広島地域と球団のあり方」という論文を書きました。これは学校の授業などの課題ではなく、自分がカーブ好きだからという理由で思い立ち、趣味のような感じで書いたものでした。書き上げた論文を、最初は周りの友人やゼミの先生などに見てもらい、そこからできた関係で今度は市民グループやマスコミの方、そして最終的にはカーブ球団の方にまで読んでいただくことができました。

その人と人とのつながりを自分で振り返ってみると、本当に面白いというか不思議な感じでした。まさかこんなに広がっていくとは夢にも思いませんでしたし、人間のネットワークというものをこれまでの人生の中で一番強く感じられた体験でした。

その体験をもっと自分の中で活かしたいと思い、3年生のときには様々なカーブのイベントに参加させていただき、意見発表をしたりもしました。また、今年5月に「ENTRANCE」というカーブを軸に若者を盛りあげようというサークルを結成、夏休みにはカーブの1軍チームに帯同取材まですることもできました。

4月から私は社会人になりますが、これからもこの学生生活でできた縁を大切にしていきたいなあと考えていますし、またこれからもさらにつながりを広げていくことができたらいいなと感じています。



宮島で「地域スポーツ活性化」を論じる
(ENTRANCEのキャンプにて)

学生時代の思い出と社会人になって思うこと

1番を目指せ！

ネットトヨタ中国 副社長 中野 文夫
広島自動車工業短期大学（現短期大学部） 昭和45年3月卒業



私は昭和45年トヨタカローラ広島にエンジニアとして入社し、平成13年に今の会社であるネットトヨタ中国(旧トヨタビスタ広島)にやってきました。

勉強は学生時代にがんばったと言うより、社会人になってからがんばりました。負けず嫌いな性格もあり、常に1番を目指すという気持ちが社会人になって勉強することにつながったのだと思います。

きっかけは入社後少ししてセリカが発売されたこと。当時の大衆車が100万円しない中でセリカは200万円近くし、高級スポーツカーといったところでした。そういった車のユーザーの大半はやはり社会的に成功された方が多く、憧れるものがありました。その時に決心したことは「セリカを整備する者の中で1番になるぞ！」。

セリカを整備することで憧れる人たちと接することができるわけですが、私が入社してあればお客様と整備士という接点に変わりはない、他のどの整備士であってもお客様には関係ないわけです。しかし私は憧れる人達に少しでも近づきたい、対等に付き合いたいという想いから、整備するときは私を選んでもらえるよう、無我夢中で勉強しました。やはり負けず嫌いで「1番になるぞ！」と思い、がんばることで今の自分があるのだと思います。

学生時代は勉強することが嫌かもしれませんが、でも社会人になって「あの頃勉強しておけば」と思うことは多々あります。これは社会人の誰しもが言う言葉かもしれませんが、なかなか思い立つのは難しいと思いますが、1つでも多く知ろうという気持ちを持つと良いかもしれませんね。

ネットトヨタ中国は1番を目指そうとする社員ばかりです。そんな活気あふれる職場を見てみたくなったら、気軽に遊びに来て下さい。いつでもお待ちしております。



学生(中)も登場した爆笑ライブ

クリスマスフェア

12月16日(土)午後、恒例のクリスマスフェアが会場を昨年までの立町キャンパスから上瀬野キャンパスに移し開催されました。メイン会場である現代社会学部300人教室では、大学吹奏楽愛好会、広島国際学院高校 brassバンド部OBや学内ロックバンドによる演奏が行われ、フェアを盛り上げました。加えて若手お笑い芸人を招いてのライブも行われ、広い会場内は爆笑の渦に包まれました。このイベントと並行して、1階玄関前では教職員による屋台

も出され、豚汁や焼きそばといった軽食や飲み物がふるまわれました。中でもとりわけ人気の高かった水餃子屋台は、行列ができたほどの大盛況でした。

今回のクリスマスフェアは若手教職員の発想から企画されたもので、大学の活性化、学生と教員の親睦、さらには学生へのサービス向上を目的に、大学・短大の全学生を対象として開かれました。工学部や情報学部の学生も来場しやすくするため中野キャンパスから臨時バスも運行し、普段行き来の少ない両キャンパスの学生たちが交流するよい機会ともなりました。



行列のできる屋台

先輩「頑張る」自転車競技部 「ツール・ド・北海道」悲願の総合優勝

愛三工業レーシングチーム 西谷 泰治(1999年高等学校総合システム科卒)

「ツール・ド・北海道」、この大会は私にとって特別なものであり、今年の最高目標でした。過去6回出場、5回のステージ優勝を経験しながらも、最高の栄誉である総合優勝には今一步届かず、悔しい思いをしてきました。そのため、このレースに懸ける思い入れは強く、昨年まで自分に不足していたものは何かを考え、あらゆるシチュエーションを想定し、それに対応できるトレーニングをすることに1年間取り組み、本番を迎えることになりました。

レースは旭川市でのプロロードから札幌大通り公園でのクリテリウムまでを競う全長735.7kmで行われ、第3ステージで区間優勝と同時に総合トップに立ち、最終日までトップを譲ることなく、初の総合優勝を手にすることができました。この勝利は何物にも代え難い大きな喜びと感動を与えてくれました。チーム全員の意思統一、スタッフとの連携、沿道の応援、職場の理解、何一つ欠けても手に入れることはできなかったでしょう。

大会を通じて新しい発見もありました。自分の走りに多くの人が共感・感動してくれるということ、そういう人たちのために走ることが自分の存在意義であるということ。

次の目標は12月に行われるアジア大会(カタル・ドーハ)の「マディソンレース」、「4km団体追い抜き」でメダルを獲得することです。自分のスタンスを崩さず、もっと多くの人に感動してもらえよう努力して、レースに臨みたいと思います。



優勝おめでとう!

【ドーハ結果速報】

4km個人追抜競走	銀メダル
4km団体追抜競走	4位
マディソン	7位

★ 今後の主な行事予定	大学・短大	学内企業セミナー(大・2/1~2)	会社説明会(短・2/1~3)	一般入試・前期(2/3~5)
		公開卒業研究発表会(現・2/10 工・2/17)	保護者懇談会(短・2/17)	
		一般入試・後期(3/10)	卒業式(3/19)	
高校	推薦入試(2/2)	マラソン大会(2/11)	一般入試(2/15~16)	卒業式(3/1)

67号訂正：3ページ・劉奇さん 8・11行目「栗田先生」→「栗田先生」

10ページ・学外展 2行目「17回」→「18回」 マラソン大会 1行目「14日(土)」→「14日(日)」

この広報誌はホームページでご覧になれます。

<http://office.hkg.ac.jp/~kikaku/kouhou/>